

# 『大いなる遺産』における欲望

## Desires in *Great Expectations*

杉田 貴瑞

Takayoshi SUGITA

### はじめに

『大いなる遺産』はその題名が示すとおり、様々な人物たちの「期待 (expectations)」が交錯する物語である。H. M. Daleski が指摘するように、作中ではマグウィッチやミス・ハヴィンシャムなどの登場人物たちも自身の置かれた状況の変化を期待する (238-39)。そのように様々な期待があるなかでも、とりわけ作品の中心にあるのは、ピップの「紳士になりたい (紳士になれるかもしれない)」という期待であろう。だが、その儂い期待を抱かせたマグウィッチの死は、ピップの期待が幻滅に終わることを意味する。G. K. Chesterton が語るように、ディケンズの作品すべてが「大いなる期待」という主題に沿うなかで、この作品は『大いなる遺産』 (*Great Expectations*, 1860-61) という題名にも拘らず、唯一主人公の期待が裏切られる「大いなる幻滅」の物語とも考えられる (200)。このような前提を踏まえれば、本作における批評の大半が主人公であり、語り手でもあるピップに集中するのはやむを得ない。<sup>1</sup>

だが、そもそもピップの期待が成立するためには、なんとといっても彼の淡い夢物語を、現実における期待へと引き上げるマグウィッチの存在が必要不可欠である。マグウィッチの存在なくして、ピップは「大いなる期待」を膨らませることすらできなかったのだ。そのため、マグウィッチとピップの関係に注目する先行研究も少なくない。たとえば、Robert Barnard はマグウィッチをピップの「虚偽の父親」と呼び、ピップを誤った方向へと導く役割を果たすと述べる (248-49)。また、Anny Sadrin はピップの父親殺しの願望に着目して、マグウィッチとジョーへの言動を読み解いている (95-111)。これらはいずれも、マグウィッチとピップの擬似父子関係について論じている。だからこそ二人の間ではまさしく財

産贈与が問題になるはずである。

だが、実際にピップがマグウィッチの遺した財産を受け取ることはない。マグウィッチの死後ピップは自分の意思で明確に受け取りを拒絶する。ピップはマグウィッチから何も受け取らずにいるのだろうか。マグウィッチが築いた金銭的な財産だけではない両者の間の相続はなかったのだろうか。その問題を考察するためには、事の起こりであるマグウィッチがピップに財産を与えようとした行為について考える必要があるだろう。しかし、マグウィッチの財産を贈るという行為は、それ自身が誤解や自己欺瞞といったピップの精神的な問題と密接に関係しているために、ピップ個人の問題として捉えられてきた。そこで本論では、まず財産を贈るという行為におけるマグウィッチ本人の動機について検証して、それがピップへの欲望にあったことを示す。<sup>2</sup> その前提を踏まえたとえで、後半は、ピップのエステラへの愛に注目して、マグウィッチの贈り物がその欲望であったと明らかにしていきたい。

## 1. マグウィッチの欲望

そもそもマグウィッチは、なぜピップを紳士に仕立て上げるなどという計画を立てて、実行に移したのだろうか。その動機に関しては、二つの理由が想定される。その一つ目としては、復讐が挙げられるだろう。先行研究においてもマグウィッチの動機を復讐に見る例はいくつも存在する。たとえば Q. D. Leavis はマグウィッチのなかに「最後の裁判でコンピソンを不当に優遇した社会に復讐したいという願望」(316)を見ており、その動機を社会に対する復讐であると解釈する。また A. E. Dyson も、「ピップへの感謝の念は、社会への復讐という筋立てとつり合いが取れている」(238)として、リーヴィスと同じく、幼少のピップが助けてくれたことへの恩返しと同時に、社会への復讐を読み取っている。実際には、ミス・ハヴィシャムの場合と異なり、ピップの語りにマグウィッチの計画が復讐であると明記されることはない。しかし、マグウィッチは紳士面をしたコンピソンへの強い恨みを何度も口にする。マグウィッチ自身の言葉ではコンピソンへの恨みにとどまっているが、本人が明確に意識していなくとも、復讐という動機が無意識のうちに紳士コンプレックスのような形で言動に表れているのだ。

二つ目の理由としては、ピップへの愛情が挙げられるだろう。物語冒頭、飢えて死にかけていたマグウィッチを、恐怖に支配されていたとはいえ、ピップは救う。マグウィッチにしてみれば、自分の生命を救ってくれた子供に恩返しをしようと考えても何ら不思議はない。だからこそマグウィッチは、ピップに対する強い愛着を何度も語っている。ピップが沼地に食べ物を持ってきてくれたときには、

「ありがとうよ、坊主 (Thankee, my boy)」(19) とピップの親切に礼を述べる。これはピップが「私の囚人 (my convict)」とマグウィッチを呼んでいることと呼応している。互いに「私の」とつけることで、ふたりの間の感情のつながりが示される。また、オーストラリアからの帰国直後にマグウィッチが「お前はおれの息子だ—— 実の息子以上のな (You're my son — more to me nor any son)」(320) と言うときにも、誇張された表現でこそあれ、その言葉に嘘はなく、本当にピップを愛していることがわかる。つまり、作中一貫してマグウィッチはピップに親しい感情を抱いている。Harry Stone もこの点について、「マグウィッチとその愛情がピップへの本当の贈り物である」(310) と述べて、愛情こそがピップに対するマグウィッチの感情の根底にあったと主張している。

以上のような事情を整理すれば、次のことが明らかになるだろう。マグウィッチという登場人物個人の観点からすれば、ピップへの愛情によって行われる財産を贈るという計画が、物語全体の構造の観点からすれば、自分を見下した社会への無意識的な復讐という構図を作り上げてしまっているのだ。だが、そうであるとするならば、ここに一つの矛盾が生まれる。マグウィッチは、自分を見下した社会への復讐心からピップを紳士に仕立て、恩恵者としての立場に優越感を感じている。それはすなわち、恩人であるはずのピップを復讐の道具にすることになるとも言える。そのために彼の計画は、見方によっては、ひどく不自然なものになってしまう。しかも、当の本人はその状態に無自覚であり、ひたすらピップに財産を贈るために働く。これらの事情を踏まえると、マグウィッチ個人のピップに対する感情には、愛情や復讐といった動機だけでは説明しきれない部分もあるのではないだろうか。さらに言えば、マグウィッチ本人にも、あるいは作者ディケンズにも把握しきれない感情の渦のようなものがあるのではないか。

そこで視点を変えて、マグウィッチの感情の「質」ではなく、「程度」に注目してみたい。すると、マグウィッチの感情にはかなりの行き過ぎが見受けられる。それは、彼が英国に戻ってくる場面を描いた第 39 章に顕著に表れている。ピップとの再会を果たしたマグウィッチは、相手に自分を認識してもらえないことに、わずかながらも失望した様子を見せる。

“It’s disappointing to a man,” he said, in a coarse broken voice, “arter having looked for’ard so distant, and come so fur; but you’re not blame for that — neither on us to blame for that.” (315)

マグウィッチは「どちらが悪いわけでもない」と言いながらも、すぐに自分のことを思い出してくれなかったピップに落胆している。元をたどれば、匿名で財産

を贈るという行為を選択したのは、マグウィッチの側であって、ピップにはどうすることもできなかったはずだ。それにも拘わらず落ち込むマグウィッチの態度に、一方的に溜め込んできたピップへの抑えきれない心情が垣間見られる。

マグウィッチの態度は、狼狽したピップの姿との明確な対比によって、一層高圧的なものに映る。正体を明かしたマグウィッチは、ショックのあまり黙り込んでしまうピップに向かって「俺がお前を紳士にしたんだよ！」(319)、「俺が恩人だとは思わなかったのか？」(321)と畳み掛けるように訴える。これらはすべて「自分はこれだけお前のために頑張ったんだ」とピップに分かってほしい一心から発せられた言葉だ。だが、あまりに激しいマグウィッチの感情の吐露は、読者の眼には愛情の押し売りと映るだけである。

むしろ、マグウィッチの根本にあるのは、この感情の爆発である。すでに見てきた愛情や復讐心も、この激しい性格によって歯止めが利かなくなっている。だからこそ、流刑囚である自分が本国に帰還するのは、生命にも関わる危険であると分かっているにも、マグウィッチは戻ってきた。この決断は、紳士を作って社会に復讐する、あるいはピップへ恩返しするという目的さえも損ないかねない。それでもマグウィッチは戻って来ずにはいられない。マグウィッチをそこまで突き動かす力は、ピップに会いたいという「欲望」である。マグウィッチはピップに向かって、「いつかきっとあの子に会って、あの子のいるところで正体を明かそう。そう心に決めていたんだ」(321-22)と言い放つが、これこそ愛情や復讐心よりもっと根源的なところにあるマグウィッチの動機なのだ。

なぜこのように強いマグウィッチの欲望が生まれたのかを詳しく検討するためには、彼の人物像を掘り下げていく必要があるだろう。本人の言葉を借りれば、彼の半生は「牢屋に入っては出て、また牢屋に入っては出て、また牢屋に入っては出る」(346)ことの繰り返しだった。孤児として生まれ、自我が芽生えるよりも前から盗みを繰り返した悪党であり、まさに罪人として生きてきた人物なのだ。同時にマグウィッチは、このような経歴が自身の境遇と深く結び付いていることも示唆する。子供のころに盗みを働いた理由について、「胃袋には何か食べ物を入れなきゃならなかったんだ、そうだろう？」(347)と言って、貧困のなかで生物的な欲求からやむなく犯行に及んでいたと告白する。また、第40章でも「もしこんなに大喰いの性質じゃなけりゃ、厄介事も少なくて済んだだろうに」(331)と述べており、この動物的な欲求が彼の本質の一端であることを吐露している。つまり、マグウィッチは、人一倍強い動物的な欲求から短絡的に犯罪に手を染める単純な性格を与えられていたと考えられる。ピップがマグウィッチの食べる姿を見て犬を連想したり、軍曹が取っ組み合いをする二人の囚人に向かって「けだものみたいな真似はやめろ」(36)と怒鳴りつけたりするのは、マグウィッ

チが動物のように本能的な衝動に従うだけの存在であることを強調している。

しかし、マグウィッチのピップに対する感情は、生物的な欲求あるいは本能的な衝動に留まらないほどのエネルギーがあると考えられる。なぜならその欲望は、ピップと出会ったあとマグウィッチがオーストラリアで10年以上にわたってじっくりと温めてきたものだからだ。この10年以上という歳月が、元来の本質であった激しい衝動を欲望へと変化させている。流刑中のマグウィッチについては、彼が第39章で語るわずかな断片から推測するほかないが、すべてがピップのためということだけは、はっきりしている。マグウィッチは次のように語る。

When I was a hired-out shepherd in a solitary hut, not seeing no faces but faces of sheep till I half forgot wot men's and women's faces was like, I see yourn. I drops my knife many a time in that hut when I was a eating my dinner or my supper, and I says, 'Here's the boy again, a looking at me whiles I eats and drinks!' I see you there a many times, as plain as ever I see you on them misty marshes. (320)

マグウィッチの脳裡には、少年だった過去のピップが明らかに焼き付いている。実際には彼の脳裡に焼き付いているのは、過去のピップをもとにマグウィッチが作り上げたピップの幻影である。その幻影はたしかにピップへの愛情から生まれたものかもしれないが、すでにマグウィッチの内部で欲望を生み出す原動力へと変化している。孤独のなかで自分の殻に閉じこもるマグウィッチにとって、ピップの幻影はいわば一種の麻薬のように働き、酔わせてくれるものと言える。植民地でのつらい生活を忘れさせ、過酷な現実に耐えさせたのはピップの幻影であり、これはマグウィッチにとっては精神の目覚めといってもよいだろう。だからこそ、マグウィッチは植民地ですべてをなげうって財産を作ることができた。ここに至ってピップはマグウィッチにとって、精神的な意味における生への欲望となったのである。

## 2. マグウィッチの変化

マグウィッチにとって、ピップは欲望の対象である。では、ピップは最後までマグウィッチの欲望に圧倒される存在だったのだろうか。第3部に入ると、ピップとマグウィッチの関係は徐々に変化する。マグウィッチはピップに対して先述の高圧的な態度ではなくなり、それに応じるかのようにピップの側でもマグウィッチへの感情がより親身なものへと変わる。この変化についてはこれまでピップが精神的成長を遂げる段階にあったために起こったものとされてきた。<sup>3</sup> し

かし、マグウィッチにも大きな変化が起こっていることを認めずにはいられない。

すでに見たとおり、帰国直後のマグウィッチの態度は、いかにも粗野で横暴なものであり、台詞も多く饒舌に語る場面が多い。しかし、自らの半生を振り返る第42章を過ぎると、マグウィッチは途端に口数が少なくなる。これはピップが国外逃亡の準備に奔走し始める時期と重なる。行動的になるピップとは対照的に、マグウィッチは部屋の中に閉じこもるようになり、大人しくなっていく。少しでもコンピソンに見つかるリスクを減らすために、ミルポンド・バンクにあるクララの家の階上に移ったマグウィッチの様子は、次のように描かれる。

He expressed no alarm, and seemed to feel none that was worth mentioning; but it struck me that he was softened — indefinably, for I could not have said how, and could never afterwards recal [sic] how when I tried; but certainly. (377)

言うまでもなく、この変化にはプロット上の要請が働いている。見つければすぐに絞首刑になってしまうマグウィッチが外を気安く出歩くわけにはいかず、籠りきりになるのは当然の成り行きである。だが、そのような状況下にあっても構わずピップに会いに行ってしまうのが、マグウィッチという男だったのではないか。それにも拘わらず、ここで描かれるマグウィッチはピップやハーバートの言いつけを聞き分けよく守る子供のようだ。ピップやハーバートがマグウィッチの変化に気付いているように、マグウィッチの方でもピップの心情の変化に気付いているのではないだろうか。

実際には二人の心情が変化していく様は作中で詳細には描かれていない。<sup>4</sup> マグウィッチはただ沈黙するようになるばかりだ。それでも彼が十分に満足していることは読み取れる。いざ逃亡を企てようとする第54章においても、ピップに再会したときのような、貪欲なまでに自分の願望を叶えようとしていた姿はなく、マグウィッチは落ち着き払っている。あまりに静かな様子を心配したピップに、元気がないのかと指摘されたマグウィッチは「たぶん、俺もちっとばかし歳をとったんだろう」(438)と答えているが、本当に老け込んでしまったかのようだ。そしてマグウィッチの充足感は、コンピソンとの格闘を終えてピップに介抱される場面で強く打ち出される。自らも傷ついたマグウィッチは「運に任せてみたが、俺は満足だよ。お前の姿も見られたしな。もう俺なしでも紳士になれるさ」(447)とピップに語りかける。しかし、ピップとの間に再び強い感情のつながりを結べたことに、マグウィッチは満足しているのだ。

ピップとの距離を縮めることは、マグウィッチの脳裡に焼き付いていた少年ピップの幻影を、実在の生きた青年ピップへと修正する作業でもある。これに

伴って、原動力を失ったマグウィッチの欲望も徐々に色褪せていく。第 56 章での死の場面においてもマグウィッチは穏やかなままである。最期の時間をピップと共に過ごしたいというささやかな願いを口にするマグウィッチはむしろ死を覚悟して、それを受け入れるかのようであり、燃え立つような強烈な感情は消え失せてしまっている。マグウィッチのなかの欲望は、ある種の諦念へと浄化してしまっただ。欲望を失って抜け殻のようになったマグウィッチは、当然の結末として死を迎えるしかない。

### 3. ピップの欲望

これですべてが解決したかに思われる。同じ時間を少しでも過ごすことによって、マグウィッチとピップは互いに共感を覚えた。<sup>5</sup> マグウィッチの欲望はピップを紳士にすることはできなかったが、少なくともそれまでの「思知らずなピップ」を変えることができた。マグウィッチの欲望は、ピップの再生に不可欠なものだったのだ。だが、このように明快に割り切れる解釈ができないのもディケンズ作品の特徴だ。なぜなら、マグウィッチとピップの和解でこの物語は終わらないからだ。<sup>6</sup> 最後までプロットを追うと問題点が浮かび上がってくる。とりわけ最大の問題点として挙げられるのが、しばしば議論にのぼる物語の結末におけるエステラの扱いである。

ディケンズが当初用意した結末では、ピップとエステラはピカデリーで再会を果たして終わる。エステラはすでに再婚しており、ピップが彼女と結ばれる可能性は残されていない。しかし、ディケンズが書き直した後の現行の結末、いわゆるセカンド・エンディングにおいては、ピップとエステラの行く末は曖昧なままにされている。結末の直前、ジョーの家でビディーにエステラのことについて思っているのかと聞かれたときにも、当初の結末では「大丈夫だよ」と答えているのに対して、セカンド・エンディングでは「うん——そう思うよ」(481)と曖昧な返答に代わっている。<sup>7</sup> つまり、ピップはエステラをあきらめきれないということだ。<sup>8</sup>

マグウィッチが本当の恩恵者であると知らされたときに、ピップが最も嘆いたのは、エステラを失ってしまうことだった。Keith Easley が、「この本はエステラに捧げられている」(214)とまで述べているように、ピップの欲望の対象はエステラその人である。そのため、ハヴィンガムの関与が一切否定されて、犯罪者であるマグウィッチとの関係が明るみに出た以上、エステラとの将来は完全に消え去ったのだというピップの確信は、重大な意味を持つ。それでもピップはエステラを追い求めてしまい、ついには彼女に愛の告白をする。

You are part of my existence, part of myself. You have been in every line I have ever read, since I first came here, the rough common boy whose poor heart you wounded then. You have been in every prospect I have ever seen since — on the river, on the sails of the ships, on the marshes, in the clouds, in the light, in the darkness, in the wind, in the woods, in the sea, in the streets. You have been the embodiment of every graceful fancy that my mind has ever become acquainted with.  
(364)

それまでの手に入るかもしれないという状態から、絶対に手が届かない存在になってしまったことで、ピップの感情は爆発してしまう。「僕が見たすべての景色のなかに君がいたんだ」とエステラに強く訴えかけるピップの姿は、あたかもオーストラリアでの暮らしを独白するとき、「お前さんの顔を見た」と語るマグウィッチと重なる。マグウィッチにとっては、オーストラリアで見たピップの幻影が、「優雅な空想」であったのだ。

むしろマグウィッチの欲望は、今ではピップの欲望に取って代わられてしまったかのようだ。ピップはマグウィッチの過去を知った後に行動的になっている。マグウィッチの国外逃亡の準備に加えて、エステラの出生の謎を解き明かすなど、次々に自らの欲望を叶えようとする。とりわけエステラの出生については、ピップ自身も理解しきれないほどの情熱をもって追究する。弁護士のジャガーズ、その事務員のウエミック、ミス・ハヴィシャム、マグウィッチの結婚の話聞いたハーバートと、行く先々で情報をかき集めてエステラの両親を突き止める。この欲望には、語り手であっても容易に答えを見出せず、次のように回想する。

I was seized with a feverish conviction that I ought to hunt the matter down — that I ought not to let it rest, but that I ought to see Mr. Jaggars, and come at the bare truth.  
(408)

もはや自分に制御できない感情を裡に秘めたピップは、言葉のとおりジャガーズから真相を聞き出してすべての謎を明らかにしてマグウィッチとエステラの間を暴く。エステラのためでも、その両親のためでもなく、「誰のために秘密を暴こうというんだね？」(414)と問いかけるジャガーズはその時点ですでに、ピップの欲望を見抜いているのだ。

マグウィッチの死後ピップは財産を失い、重病を患い、ビディーとの結婚という望みも絶たれて、再出発を余儀なくされる。それから数年が経って再び祖国に帰ってくるピップは、まじめに働いていると語り、自分は成長したのだと主張す

る。しかし、実際には彼が新たに欲望を突き進める役割を担ったに過ぎない。結局のところ、エステラという欲望の対象をあきらめきれないピップに、平穩は訪れない。セカンド・エンディングにおいて、ピップの欲望は消えていない。ビディーに対しては否定するものの、ピップがエステラを慕う気持ちは無くなっていないのである。そのため、ピップは「エステラのために」(482) サティス・ハウスに足を向けずにはいられない。物語の末尾で、荒れ果てた庭のベンチにエステラとピップと一緒に腰かけて会話する場面で、語り手は次のように描写する。

The moon began to rise, and I thought of the placid look at the white ceiling, which had passed away. The moon began to rise, and I thought of the pressure on my hand when I had spoken the last words he had heard on earth. (483)

オーストラリアでマグウィッチがピップの姿を思い浮かべたように、そしてピップがエステラを自分から切り離せなくなっていたように、今度はピップの脳裡にマグウィッチの姿が焼き付いている。しかも、マグウィッチがピップの顔だけを思い描いたのに対して、ピップはマグウィッチの「穏やかな視線」だけでなく、「手の感触」という身体的な感覚にまで言及しており、いかにマグウィッチの幻影がピップにとって大きな存在であるかが分かる。ピップと共感しあうことで、満足して死んでいったマグウィッチとは異なり、ピップはマグウィッチの死という新たな喪失感を抱えながら、生き続けなければならない。その先にエステラという欲望の対象がある。幸せな結末が予感されてはいるが、最後の一文に至っても、ピップにエステラが与えられるかどうかは不透明なままだ。物語の末尾においても、ピップの欲望が完全に満たされることはないままに終わるのである。

## おわりに

マグウィッチにとってピップは初めて共感できる他者だった。墓地で出会ったとき、彼はピップが自分と同じ孤児であることを知り、自分に優しく接してくれる存在であることを知った。一方でピップは初めマグウィッチに恐怖するだけだったが、のちに食料とやすりを届けて言葉を交わしたときには、彼に親近感を覚えるようになっていく。そしてマグウィッチが眼前から消えてすぐに、ピップはサティス・ハウスに行くことになり、エステラを欲するようになる。つまり、小説の第2部の終わりから第3部でマグウィッチが死ぬまでの展開は、すでに冒頭において暗示されていたことになる。

ピップの回想録の終わりと始まりが同じ状態であるならば、それはまさしく

「大いなる幻滅」に他ならない。だが、少年時代のピップが「今とは全然違う暮らしができるまで(中略)、僕は決して落ち着かないし、落ち着けないんだよ」(128)とビディーに打ち明けていたのに較べて、サティス・ハウスの廃墟でエステラと会うときのピップは、実に冷静である。サティス・ハウスの幻想的な情景、マグウィッチの「穏やかな視線」、そして最後には霧が晴れるという描写の流れは、抑制の効いた静かな印象を読者に与える。このように落ち着いた描写が続くからといって、ピップのエステラへの欲望が薄れたことを意味するわけではない。彼がエステラを欲しているのはすでに述べてきたとおりである。ピップが以前と較べて、欲望に振り回されることを恐れていないだけだ。ピップが成長したとすれば、この一点においてであろう。そして、ピップの成長がわずかでも達成されたならば、「大いなる幻滅」とまでは言い切れないだろう。だからこそ、語り手は自分の欲望を回想録のなかで提示できる。

ディケンズはこの作品に取り掛かるにあたって、同じ一人称小説である『デイヴィッド・コパフィールド』との繰り返しを恐れた。ディケンズが意図したとおり、二つの作品の主人公は違う。デイヴィッドは、自分の死後も輝き続けてくれるであろうアグネスの顔で回想を締めくくる。だが、ピップはエステラへの欲望で回想を終わる。欲望に忠実に従ってエステラを求め続けるピップがこちらにいて、あちらにはアグネスさえいればと満ち足りたデイヴィッドがいる。『大いなる遺産』には、アグネスのようにすべてを満たしてくれる存在は残されていないかもしれない。しかし、そのような世界にあってもピップが絶望しないのは、偏にこの欲望の力によると考えられる。ジャガーズの依頼人マイクが、偶然にも「人間、自分の感情ってやつは抑えられないもんですよ」(415)とウェミックに反論しているが、傍で聞いていたピップにとって、これは頷ける内容だったはずである。ピップがマグウィッチから受け取った本当の遺産は、この尽きることのない欲望だったのではないだろうか。

※本稿は2015年11月28日に開催された第55回早稲田英文学会での口頭発表の原稿をもとに加筆修正したものである。

### 付記

本論における『大いなる遺産』からの引用はすべて、*Great Expectations*, ed. Charlotte Mitchel (Harmonsworth: Penguin, 1996) に依拠し、すべて引用者が訳出した。

## 註

- 1 たとえば Julian Moynahan は、ピップの罪の意識という主題をマグウィッチとの関連ではなく、ドラムルとオーリック二人の分身に見る (60-79).
- 2 本論においては、具体的な目標が設定された場合には、「期待」という言葉を、その期待に至る根源的な無意識の段階での強い心的状態を指して「欲望」と呼ぶことにする。そのため、本論中の「欲望」とは精神分析的な意味合いでの「欲望」とは必ずしも一致しない。
- 3 たとえば、G. Robert Stange は、「ピップの成長 (Pip's progression)」(16) という言葉を使って、ピップが精神的な成長を遂げると述べており、その必要条件として「マグウィッチへの愛」を挙げている。
- 4 マグウィッチが沈黙して、ピップとの関係性がより親密なものになる間のことは直截描かれぬが、同時並行してピップと、彼に誤った期待を抱かせるもう一人の人物ミス・ハヴィシヤムの和解が進むことは、プロット上の仕掛けとして注目に値すると思われる。
- 5 Sue Zemka は、作品における時間に注目して、ピップがマグウィッチの流刑地での労働時間に気付き、思いを寄せることで、両者の間に本当の理解が生まれると指摘する (149-51)。筆者もほぼ同意見だが、同様にマグウィッチが帰国してからの短い時間にも注意を向ける必要があるだろう。
- 6 Peter Brooks は、この作品の統一性をマグウィッチの死を描く第 56 章までに見ており、ピップとエステラの新しいロマンスのような話は別の物語に属するべきだと論じている (138) が、本論ではその後に描かれるピップの姿にもマグウィッチの影響が表れていると考える。
- 7 結末の変更の経緯については、John Forster の *The Life of Charles Dickens* が詳しい (335)。
- 8 ピップのエステラへの欲望については、John O Jordan もピップがそもそもなぜこの回想録を書いたかという理由の一つとして挙げている (80-82)。

## 引用文献

- Barnard, Robert. "Imagery and Theme in *Great Expectations*." *Dickens Studies Annual* 1 (1970): 238-51.
- Brooks, Peter. *Reading for the Plot: Design and Intention in Narrative*. Oxford: Clarendon, 1984.
- Chesterton, G. K. *Appreciations and Criticism of the World of Charles Dickens*. London: Dent, 1911.
- Daleski, H. M. *Dickens and the Art of Analogy*. London: Faber, 1970.
- Dickens, Charles. *Great Expectations*. Harmondsworth: Penguin, 1996.
- . *The Letters of Charles Dickens*. Ed. Graham Storey and Kathleen Tillotson. Oxford: Clarendon, 1995.
- Dyson, A. E. *The Inimitable Dickens*. London: Macmillan, 1970.
- Easley, Keith. "Self-Possession in *Great Expectations*." *Dickens Studies Annual* 39 (2008): 177-222.
- Forster, John. *The Life of Charles Dickens*. Vol. 3. Cambridge: Cambridge UP, 2011.
- Jordan, John O. "The Medium of *Great Expectations*." *Dickens Studies Annual* 11 (1983): 73-88.
- Leavis, Q. D. "How We Must Read 'Great Expectations.'" *Dickens the Novelist*. Ed. F. R. and Q. D. Leavis. London: Chatto, 1970. 277-321.
- Moynahan, Julian. "The Hero's Guilt: The Case of *Great Expectations*." *Essays in Criticism* 10

(1960): 60-79.

Sadrin, Anny. "Dickens's disinherited boy and his great expectations." *Parentage and Inheritance in the Novels of Charles Dickens*. Cambridge: Cambridge UP, 1994. 95-120.

Stange, G. Robert. "Expectations Well Lost: Dickens' Fable for His Time." *College English* 16 (1954): 9-17.

Stone, Harry. *Dickens and the Invisible World: Fairy Tales, Fantasy, and Novel Making*. Bloomington: Indiana UP, 1979.

Sutherland, John. *Victorian Novelists and Publishers*. Chicago: U of Chicago P, 1976.

Zemka, Sue. "Chronometrics of Love and Money in *Great Expectations*." *Dickens Studies Annual* 35 (2005): 133-56.